

初期淨土教典籍の伝来に就て

龍

安

雄

(一)

先ずこゝに云う初期とは仏教伝来より奈良時代中期迄の時代に限定して、この小論を考察する所以は、仏教諸宗派形成への基盤である所の典籍の伝来は何時頃吾國に伝来し受容されたかを伺うと共に如何なる至路をもつて伝来されたかを推察し、以下論を進めたいと思ふ。思ふに如何なる宗派と云へども關係典籍の伝来が出發点となつて、その思想信仰實踐が引き起されて来る事は論を待たない所であらう。

而してその伝来至路については、平安時代の林に入唐求法僧の請来目錄があれば大体の推察も可能であるが、初期に於ては仏教典籍一般に就ても同様であつて、初期の學問僧にはそのやうな目錄は存在せず、僅かに正倉院文書の聖典の書写、謄誦に關するものであり、多くの聖典の名称が別件の小、且つこれ等を詳細に検討すれば大体の推察も可能であらうと思ふ。而して注意すべきは時代的に正倉院記載事項は、大体天平年間のものであり、又其名稱を挙げたり且つ撰者の名の判明せるものとせざるものと、又それが現今の（聖典）典籍の如何なるものに當っているか、單に名称のみに依つて擬定する事は危険性を伴うものであるが、大体に於て推察出来さう、而して論を進める順序として、(一)仏教伝来後の諸外國の事情と吾國の事情を考へ、

(二) 正倉院文書特に写本を中心としたものを概略しながら考察したいと思う。

(二)

吾國に仏教伝来年次に就ては諸説あるが一般的に欽明天皇十三年壬申説(AD 552)^①と欽明帝七年戊午説(AD 538)^②とである、而してその説の何れが正しいかに就ては各々の資料に就いて考察する必要もあらうが、伝来年次に就ては欽明帝時代とする事は妥当であらう、併し二川は公伝年次であつて私的断片的に仏教伝来年次はそれよりも適る事が出来ると思う、即ち諸文化伝来の事実を升ても明白であり、又それに伴う外國交通路を合せ考へるとさ何れも然るものである。仏教私伝を記するものに「扶桑略記」^③オ三に引くものに依つて何はわるものであり、又帰化人等の間に於て母國信仰の一つとして彼等の精神的支柱として背負ひ来り、ひそかに篤信を以ていた事は想像に難くない所である、而してかような背景素地にあつてこそ公伝に際し、これを受容し短期間に高い文化形成に達し得られたと思う、

こゝで欽明帝公伝に際し吾清聖明王が欽迎仏金銅像幡蓋と共に經論若干卷を獻するとあるが、此時すでに仏教典籍の伝来があつた事は明白であるが、その其緒たるや如何なる種のものか、今こゝを知るべき資料が無い政知る事は不可能であらう、

さてこの時代は中國に於ては特に淨土教では南朝では慧聰等を中心に、北朝では曇鸞が三丕を依用とし淨土教を高揚し、七世紀には道綽・道宣、八世紀には懷感・承遠・法照等が出て居り、又朝鮮に於ては元曉・璣興・義寂・大賢等が淨土教を信奉していたときである、二川は吾國に於ては文化思想就中淨土教に於ても中國隋唐朝鮮の影響を著しく受け、その影響は如何なるものであ

るうかとの向羅も注目して考へぬならぬであらう。その個々に就てはこゝでは詳細を究める事を差しかへ、外國歸化渡來僧及び吾國よりの留学僧等の關係のあつた事實は種々文献によつて知る所であるが、今は教敎の都合上主要な事項のみを挙げて行きたいと思ふ。

先づ三國仏法伝通縁起に依ると、敏達天皇御宇丁酉十一月(CAD. 577)の条には、「復從百濟國一彼國文王獻^①延齡若干卷并律師、禪師、比丘尼呪禁師、仏土造寺工六人、遂受^②置於難波大別王寺」云々^③とあり、日本書紀、崇峻天皇元年甲子の(CAD. 588)条に、「台信所尼等謂^④大^⑤臣一日、出家文途以^⑥戒爲^⑦本。願向^⑧百濟^⑨學^⑩受^⑪戒法^⑫」云々^⑬又是日の条に、「百濟調使來朝、大臣使人一日奉^⑭此尼等^⑮將渡^⑯汝國^⑰令^⑱受^⑲戒法^⑳」云々^㉑とし、同天皇三年春三月の条(AD. 590)、「學向^㉒尼台信等^㉓、自^㉔百濟^㉕還往^㉖櫻井寺^㉗」^㉘とあり、又推古天皇三年五月戊午朔。丁卯(AD. 595)の条に「高麗僧惠慈歸化、則皇太子師之^㉙。是歲^㉚の条に、「百濟惠聰來之^㉛。此兩僧弘演^㉜、仏教^㉝並爲^㉞三空之棟梁^㉟」^㊱とある。而して又推古天皇十年冬十月(AD. 602)の条に「百濟僧觀勒來之^㊲。仍貢^㊳舊本^㊴乃天文地理書並遺甲^㊵……」云々^㊶とあり、同十年閏十月、乙亥朔己丑の条に、「高麗僧隆雲聰共來歸^㊷」云々^㊸又推古天皇十六年(AD. 608)に小野妹子と共に留学生及留学僧八人を彼の國に送つてゐる、即ち書紀に、「是時遣^㊹於唐國^㊺學生倭漢直福田、余羅譯語惠明。高麗漢人玄理。新漢人大國學向僧新漢人夏、南淵漢人請安、志賀漢人惠聰。渡人廣清等并八人也。是歲新羅人多來^㊻」^㊼とあり、この年に新羅人が多く吾國に渡來してゐる事を見えてゐる、同十七年夏四月丁酉朔、庚子の条に、「鎮座大率奏上言。百濟僧道欣惠來^㊽、爲^㊾首一十人。僧人七十五人、治^㊿千肥後國葦比津^㊽」云々^㊾とあり、同十八年春三月の条に、「高麗王貢^㊿上僧藝微。法足^㊿、藝微知^㊿五經^㊿一旦能依^㊿彩色故紙墨^㊿并造^㊿碾磑並造^㊿碾磑^㊿」云々^㊿

初期淨土教興籍の伝来について（續）

と、又推古二十三年（AD. 615）癸卯の条に、「高麗僧惠慈等^(註)于國^(註)とある。又同三十一年秋七月の条に、「是時大唐學問僧者惠南、惠光、救民、惠日、福因等並從^(註)智光兩寺一末之^(註)と、同三十三年（AD. 625）正月壬申朔、戊寅の条に、「高麗王貢^(註)僧惠灌^(註)一仍住^(註)僧正^(註)とあり、舒明天皇十一年（AD. 639）秋九月の条に「大唐學問僧惠聰、惠雲、從^(註)新羅^(註)使^(註)入^(註)京^(註)と、翌年冬十月の条に、「大唐學問僧清安、學生高向漢人玄理、伝^(註)新羅^(註)而至之、仍百者新朝貢之便共從末之^(註)等によつて明白なるように外國渡來僧、各國留學僧の巡禮又こゝにこの外記載外に幾多の交渉が盛んであつた事が伺へよう、そしてそこに幾多の典籍も流入してであらうと推定出来ようか。

(三)

こゝで聖德太子に就て一言せねばならないであらう、即ち推古十二年（AD. 644）癸卯の十七朱應法による仏法興隆、佛教精神による政治又前述の推古三年に未朝した高麗僧惠慈等について、広く仏教全体に対する理解を深め、「法華」、「維摩」、「勝鬘」の三全義疏を作らせたのである、而して又、太子の外交政策にして推古十五年、十六年の二度に渡る小野妹子等の遣への巡禮の如く、中國等との直接交渉にきで何うと云ふ、その間に一般文化と共に仏教に於ても如何に影響、刺激があつた事が予想せしめられ、外國交渉と共に幾多の内外典が請來せられた事は推察出来よう。さ小は仏教典籍と共に就中淨土教典が何時雖小に依つて伝來せられたかは、二小を明らかにする事は不可能であるが、太子の註釋鈔義疏上、仏國品に、「無量壽至云^(註)唯除五逆、誹謗正法^(註)とあつて、四十八願中、四十八願を出し、二小により察するに疏に當時、無

聖壽王はこの時迄に伝来し、太子に依つて知られていたのであらう。こゝで惠應の密請に就て一言するに學問僧惠應は推古十六年(AD608)小野妹子に従つて入唐し、在唐三十一ヶ年にして舒明十一年(AD639)に新羅を至て帰朝し、翌十二年宮中に於て無量壽王を講じている。即ち舒明天皇十二年五月丁酉朔辛丑の条に、「大改齋因以請ニ惠應僧一令ニ説ニ无量壽王一」^(註)とあり又孝徳天皇白雉三年夏戊子朔壬寅の条に、「兩心惠應が密請してゐる、^(註)講ニ沙門惠應於内裏一使レ講ニ无量壽王一以ニ沙門惠資一論議者一以ニ沙門一千一爲ニ作應衆^(註)とあり、こゝ等に依つて何うに、吾國に於ける無量壽王講の最初であり、又帰朝に際して、必亦や當時中國に於て出来て居た一切を講末せられた事も想像されるが、その一切を何種のものであつたかは不明であるが、當時中國では盛んに教王目錄が編纂されてゐたから講末する以上、當時最も多く收録したものと云へば清仁壽二年(AD602)夜琮等は衆經目錄を編してゐる。こゝは六百八十部二千五百五十三卷であり、一切王としては當時最も信頼すべきものであつたとさしてゐる。併しこの目錄中、無量壽王の名を數せてゐるものは六種類を救うる事が出来るが、この内現存してゐるものは、「仏說阿鉢陀王二卷」^{永仙說阿鉢陀王三耶薩樓仙}とある。併し書記編纂當時果して「仏說阿鉢陀王」とあるのを無量壽王の異訳であると勘定し得たかは疑はれる所である、然らば所謂無量壽王の名の明白に知られるものにして確かに現存して居たと肯定し得るものの集(收)録されてゐる一切王は何であるかと云うと、歷代三寶記十五卷を選し、一千七百七十三部三千三百二十五卷の王典を挙べてゐる。^(註)この中、無量壽王関係のものは、九種類を救へるが現存してゐるものに

一、「仏說無量壽王二卷」

唐居國沙門康僧鑑訳

(註)

初期洋土教聖蹟の伝来について(港)

初期淨土教典體の伝来について（竟）

二、「仏說無量清淨平等覺經二卷」 月支沙門支謙訳 ^(註)

三、「仏說阿彌陀經二卷」 月支沙門支謙訳 ^(註)

であり、康僧鎧以外では明かに無量壽經と云つていない所からみて、疑うべき余地もあらうが、講經に用いたのは康僧鎧であつて一切聖請末は尸代三聖記に依ると推定して尸代三聖記は衆聖目錄に先立つ事五年に出来たものである。又惠聰は尸代二回宮講に先立つ前年の十二月、一切聖を敷説させた事も注目すべき事であらう、即ち孝徳天皇白造二年十二月（AD 655）晦の条に、「於味經宮一講ニ二千一百餘僧尼一使レ説ニ一切經ニ云々」^(註)とあり、又天武天皇二年（AD 654）三月是日の条に、「聚ニ書生一拾字ニ一切經於川原寺」^(註)とあり、當時すでに一切聖と云うまとまつた形に於て仏教聖典が伝へられていた事を知る、併しその一切聖は如何なる内容の一切聖であつたかと云う事に就ては相當議論のある問題であるが、こゝにはその詳細については省略するが、注意すべき問題は中國の種々聖錄に於て資料とするとき、編者自身等に於て果して聖典全部を知つていたか、又存していたかであり、又ある聖錄を基にし或は二書を敷字したかを詳細に見当すべきであらう。

こゝで道昭に就て一言するに、道昭は白造四年（AD 653）に入唐してゐる、即ち孝徳天皇智證四年五月辛亥朔生戌の条「^①遣大使小山上吉士長耳副使小上吉駒等同僧道通、道亮、惠施、惠滿、辨正、惠昭、僧忍、智勝、道昭、平達、道觀、學王、巨勢、屋東、氷連老人云々」^(註)とあり、玄奘に就て法相を學んでゐる。即ち同四年癸丑の条に、「道昭和尚住ニ大唐國一諸玄奘三藏一學ニ法相宗一自レ此已後漸々往還、諸師習ニ淨土法一而還伝法高僧往還云々」^(註)とあつて、道昭も帰朝に際して聖典を講束したのであらうと考へらるゝのである、又時代が下つ

て聖武天皇天平七年には玄昉が唐より帰朝している、即ち同年五月の条に、「又沙門玄昉同以
帰朝。持二度經論疏五千餘卷并佛像等悉獻大政官⁽³²⁾」とあり、至典の請束した事と何う事が
出来るか。遣唐等の入唐以来幾多の學問僧遣唐使等に依つて請束された事も論を待たぬが、前
述の道昭、玄昉にしてもその請束目錄を殘さなかつた事は遺憾であり、玄昉帰朝の際の經論疏
が如何なるものであつたかは、今こゝを明白にする事は不可能であらう、併し前述した如く、
中國に於ては、經錄を厂代こゝを編集したが唐の開元中に最も完全な目錄を編纂したのである。
こゝは智昇の撰に於る開元十八年出来た開元釈教錄である、此の一切至が天平年間吾國に於て
書寫されてゐる事は正倉院文書に明証がある、即ち天平十二年四月十五日寫至司菩等に依つて
明かである。⁽³⁴⁾ 開元十八年は天平二年に當り玄昉在唐中であり、帰朝した天平七年に經論疏五千
余卷を請束したとすれば、此の目錄に依る一切至であつたと云ふ見解も極めて妥当であり、す
でに請束してゐた事も推察出来るか、併して天平八年には、唐僧道勣、寧經門僧正菩提、林
林益僧公徽等の末朝あり、こゝに於ても至典の請束が考へられるか如何なる至典を請束したか
については詳かではない。

以上主として惠隱の官譜一切至の趣説、書寫幾多の入唐學問僧及び歸化僧等に就て考察して
来たが、仏教伝来以来諸外國特に中國、三韓との交通路に依つて一般文物流入と共に仏教典籍
の請束のあつた事は大体に於て奈良中期迄にすでに請束されてゐた事が推察出来るか。

(五)

こゝで正倉院文書に依る書寫關銀文書に依つてみるに次の如く書寫されてゐる。即ち主要至
初期淨土教典籍の伝来について(著)

初期浄土教興鑰の恒末について（巻）

典として

一、阿弥陀王（羅什訳） 神龜四年（AD.727）

林蘭淨土至（玄奘訳）天平十年（AD.738）

二、無量壽王 天平八年（AD.736）

三、觀無量壽王（玄奘訳）天平九年（AD.737）

四、披弁三昧王（玄奘訳）天平十四年（AD.742）

五、披弁三昧王（玄奘訳）天平十九年（AD.737）

次に関係註疏については、

一、無量壽王宗旨（要）（元曉）天平二十年（AD.748）

二、西卷無量壽王疏（義寂）天平二十年（AD.748）

三、西卷無量壽綱目 天平二十年（AD.748）

四、披弁三昧經疏（元曉）天平二十年（AD.748）

五、西卷無量壽王疏（玄一集）天平二十年（AD.748）

六、林蘭淨土經疏（清蓮）天平勝宝二年（AD.750）（天平十五年9-）

七、西卷無量壽王疏（玄一）天平勝宝五年（AD.753）

八、雙觀經疏（清蓮）天平十七年（AD.747）

九、無量壽王經王義 天平二十年（AD.748）

次に浄土教関係の論及び雜著に就ては

一、河林池數音声陀罗尼王 天平八年（AD.736）

- 二、十住毘婆沙論 (龍樹) 天平九年 (AD. 737)
- 三、往生論 (世親) 天平九年 (AD. 737)
- 四、西方三昧經 (龍樹) 天平十二年 (AD. 740)
- 五、安樂集 (道綽) 天平十四年 (AD. 742)
- 六、往生記 (龍樹) 天平十四年 (AD. 742)
- 七、觀無量壽經疏 (龍樹) 天平十六年 (AD. 744)
- 八、往生論註 (曇鸞) 天平二十年 (AD. 748)
- 九、報恩讚 (龍樹) 天平二十年 (AD. 748)
- 十、往生論私記 (世親) 天平二十年 (AD. 748)
- 十一、觀心三昧海王 (龍樹) 天平勝聖三年 (AD. 751)
- 十二、後出阿彌陀仏偈王 (龍樹) 天平勝聖三年 (AD. 751)
- 十三、新撰十住論 (龍樹) 天平勝聖五年 (AD. 753)
- 以上書写のみにて左論疏をみるべき
- 一、すてに天平年間に於て浄土三部王が伝来書写されてゐる事、殊に無量壽經の傍註疏が多く書写されてゐる事

二、新撰写者殊に元曉、義寂、玄一等の著論書が伝来してゐる事、尙吾國浄土教の背景に新羅學者の影響が非常に大きな役割を果してゐる事は注意してふべからう。

三、唐浄土教殊に台導の五部九卷伝来書写してゐる事、その中に於る影響のあつた事も推察される。尙、竜樹、世親、曇鸞、道綽等の著もある事も注目すべきである。

初期洋土教典籍の伝来について（巻）

專するに以上の考察に依つて初期洋土教典籍としては、既に伝来されていた事が推察される、併して正倉院文書書写関係の外に至典院請についてみるに、二川又運行していた事実を加味して考へて行くと、一般公教典籍と共に洋土教典籍が伝来受容され、奈良時代の洋土教信仰の思想に影響を与へると共に日本洋土教発展への基盤となつた事も言を待たないであらう。

（尚参考のため書写年表を附記して置いた、そしてこの至典伝来に就ては一層詳細について考察したいが、概略に止め他日につづる事とし、諸氏の御批判御指導を乞う）

洋土教典陳鑑書寫年表（初期洋土教典籍の伝来）
（大谷大学大学院研究科）
（西暦元年～西暦元年）

番号	経典及び論疏名	記述の著者	日本年号	西暦	書写	読解	出	収	備考
1	阿弥陀經	羅什	神龜4年	AD727	○		大日本書 Vol. 1, P. 382		
2	阿彌陀經	（羅什）	天平8年	736	○		Vol. 7, P. 73	鑑	記
3	阿彌陀經書王陀羅尼		8年	736	○		Vol. 7, P. 67		
4	阿彌陀經書王陀羅尼	女摩訶藏	9年	737	○		Vol. 7, P. 73	藏	記
5	阿彌陀經書王陀羅尼	女摩訶藏	9年	737	○		Vol. 7, P. 74		
6	十住思遷沙論	世親	9年	737	○		Vol. 7, P. 57		
7	往生論	世親	9年	737	○		Vol. 7, P. 63		
8	林讚洋土生讚	玄奘	10年	738	○		Vol. 7, P. 216		
9	西方三昧經	玄奘	12年	740	○		Vol. 7, P. 491		
10	觀無量壽經	玄奘	14年	742	○		Vol. 8, P. 116		

11	安樂果道碑	〃 14 〃	742	〇	Vol 8. p 85	
12	往生礼讚台尊	〃 〃 〃	742	〇	Vol 8. p 86	
13	林讚淨土至疏	清邁	〃 15 〃	743	〇	天平勝聖2 Vol 11. p 429
14	鏡無量壽至疏	台尊	〃 16 〃	744	〇	Vol 8. p 537 天平19 Vol 9. p 371
15	雙觀經疏	清邁	〃 19 〃	747	〇	
16	往生論註	臺尊	〃 20 〃	748	〇	Vol 3. p 87
17	救母護	台尊	〃 〃 〃	748	〇	Vol 10. p 320
18	隨願往生至	高平果密多	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 85
19	無量壽至宗要(旨)	元曉	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 85
20	西卷無量壽至疏	義寂	〃 〃 〃	748	〇	〃
21	〃 綱目	〃 〃 〃	748	〇	〃	
22	救母三昧至略記	元曉	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 86
23	無量壽至願生義	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 89	
24	西卷無量壽至記	玄一果	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 85
25	生生論私記	世親	〃 〃 〃	748	〇	Vol 3. p 87
26	後出所依陀公傳至	天平勝聖3年	751	〇	Vol 12. p 69	
27	觀世三昧海至	〃 〃 〃	751	〇	Vol 12. p 85	
28	西卷無量壽至疏	玄一	〃 5 〃	753	〇	Vol 13. p 35
29	救淨土群疑論	懷感	〃 5 〃	753	〇	Vol 13. p 35

(井上老實「日本洋土教成立史の研究」P44~47参照)

史大系本 I 日本書紀卷十九、三三一頁、二の段を引くものに三國伝法伝通縁起

元興寺緣起并流起資感帳、七宮聖德法王帝說

扶桑略記卷之三 國史大系本工「日吉山葉隆師法華略記云近既寺僧諱岑記云以下四

八三

三賢仙法位通緣起卷中。百仙全一。〇。九頁。日本書紀卷二十。三頁、五十三頁。

日本書紀卷二十一、國史大系本丁三百六十六頁

三百六十六頁

三
百
七
十
五

日本書紀卷二十二、國史大系本上三頁七三頁

日本書紀

日本書紀卷二十二、國史大系本 三百七十五頁以下

日本書紀卷二十二
三十八十四頁

日本書紀卷二十二
一
ク
一

三
百
八
十
四
頁

三百八十八員

五	日本書紀卷二十二、國史大系本 I 三九一頁	
六	——	三九四頁
七	——	四〇六頁
八	——	——
九	昭和公本二八右	——
✓ 十	日本書紀卷二十三、國史大系本 I 四〇六頁	——
十一	——	四一三頁
十二	望月信亨著「仙教経典成立史論」八三頁、大正藏卷五十五卷一五〇頁以下	——
十三	大正藏	——
十四	大正藏四十九、二二頁以下、望月「仙教経典成立史論」八三頁	——
十五	——	——
十六	——	——
十七	——	——
十八	——	——
十九	——	——
二十	——	——
二十一	——	——
二十二	——	——
二十三	——	——
二十四	——	——
二十五	——	——
二十六	——	——
二十七	——	——
二十八	——	——
二十九	——	——
三十	——	——
三十一	——	——
三十二	——	——
三十三	——	——
三十四	——	——
三十五	——	——
三十六	——	——
三十七	——	——
三十八	——	——
三十九	——	——
四十	——	——
四十一	——	——
四十二	——	——
四十三	——	——
四十四	——	——
四十五	——	——
四十六	——	——
四十七	——	——
四十八	——	——
四十九	——	——
五十	——	——
五十一	——	——
五十二	——	——
五十三	——	——
五十四	——	——
五十五	——	——
五十六	——	——
五十七	——	——
五十八	——	——
五十九	——	——
六十	——	——
六十一	——	——
六十二	——	——
六十三	——	——
六十四	——	——
六十五	——	——
六十六	——	——
六十七	——	——
六十八	——	——
六十九	——	——
七十	——	——
七十一	——	——
七十二	——	——
七十三	——	——
七十四	——	——
七十五	——	——
七十六	——	——
七十七	——	——
七十八	——	——
七十九	——	——
八十	——	——
八十一	——	——
八十二	——	——
八十三	——	——
八十四	——	——
八十五	——	——
八十六	——	——
八十七	——	——
八十八	——	——
八十九	——	——
九十	——	——
九十一	——	——
九十二	——	——
九十三	——	——
九十四	——	——
九十五	——	——
九十六	——	——
九十七	——	——
九十八	——	——
九十九	——	——
一百	——	——

初期淨土教興隆の経緯について(港)

世、大日本古文书卷七・四八五頁

参考文献

石田元之著「日本淨土教の研究」

井上老頼著「日本淨土教説立史の研究」

大塚徳源著「日本仏教史の研究」

森 玄巳著「遣唐使」

以
上